論文

母子健康手帳を活用した授業実践
―保育科学生が母子健康手帳を介した家族との会話から得たもの―

芝　田　郁　子

１．はじめに

子どもは未熟であり、発育・発達する存在である。特に乳幼児期は養育者としての大人が必要である。保育所等で子どもを預かっている時間において、保育者は、養育者としての保護者に代わり、子どもの「養護」及び「教育」を行っている。国はこの保育者が担う役割である「養護」と「教育」については保育所保育指針で以下のように示している。まず、「養護」については「保育における養護とは、子どもの生命の保持及び情緒の安定を図るために保育士等が行う援助や関わり」と述べている。次に「教育」は「子どもが健やかに成長し、その活動がより豊かに展開されるための発達の援助である」と定義づけている。さらに「保育においては、養護と教育が一体となって展開されることに留意する必要がある」と加えている。

つまり、簡単に言うと、「保育者は命を守り、健やかな発育・発達（育ち）を支援する役割を担うもの」と言える。その根底には「命」に対する畏敬の念や「命」への尊厳の気持ちがある。そして、どの子どもの命も何にも代えがたいものと受け止め、日々の保育実践ができる保育者が育つことが望まれる。では、保育者が守るという命の尊さを保育科の学生が何をもって自覚することができるのだろうか。そう考えたときに、親の子どもに対する愛情を実感することが理解の近道と考えた。子育ての中で親はどのような思いで子どもと向き合っているのだろうか。そのことを学生が知ることが重要ではないかと考える。

したがって、学生自身が自分の出生あるいはそれ以前の妊娠期から始まり、乳幼児期にいたる過程を振り返り、母親など家族から話を聞き、親の子どもに対する思いを知ることで、命を守ることへの責任の重さややりがい、保育者としての自覚が生まれてくると予想した。また、子育て中の親の思いから支援の重要性や必要なものは何かを学ぶことができると思われる。今までにも子どもの頃の話は思い出話として家族から話される機会は幾度となくあったであろう。しかし、今回は、妊娠・出産・子育てと時系列的に記入できる母と子の健康管理の記録である母子健康手帳を家族と見ながら、妊娠・出産・子育てについ

ての話をするという設定をした。そして学生に母子健康手帳とは何であるかを考えることを課題として与えた。母子健康手帳を介することで、記憶をたどりやすいばかりか、リアルな個別性の高い話になり、母の話でありながら、それは、保護者の気持ちに汎用されていく。学生自身は、子育ての経験はないが、家族と話をし、そのエピソードを疑似経験することで共感を持った保護者理解につながり、保護者支援への動機づけとなるのではないかと期待する。要するに、本研究は母子健康手帳を介した母親の妊娠・出産・育児のエピソードから何を学生が学んだかを知り、命の尊厳を意識したか、保護者理解ができたかを学生が書いたレポートから見ていくものである。

2．研究の背景

母子健康手帳は母子保健行政において重要な役割を果たしてきた。母子健康手帳制度の普及が妊産婦及び乳幼児の死亡率低下に寄与している。母子健康手帳はドイツの妊産婦登録制度を参考にしている。旧厚生省の瀬木光男が視察で訪れたドイツの病院で取り入れられていた「Mutterpass（母親手帳）」（母親の妊娠経過を記録するカルテの役割を果たした）に感銘を受け、1942 年（昭和 17 年）、日本用に改善を加え導入した。現在では幾度の改正を経て「母子健康手帳」制度として、母子の健康管理に欠かせないものとなった。そして、世界 40 か国以上でこの日本の手帳を参考に「母子健康手帳」が導入されている。

日本での導入は「妊産婦手帳」という名称で、第二次世界大戦中の時期に始まり、「産めよ、増やせよ」と戦争に勝つために子どもの出生数を増やすことが目的であった。1948 年には子どもの健診や予防接種の記録が付け加えられ、1965 年には「母子健康手帳」に改められ、母子の健康のためのものになった。そして、育児のしおりや事故防止、乳幼児の栄養、働く女性のための出産、育児に関する制度の他、父親の育児参加を促進する記載も加わり、母子の健康に関する情報が多く載せられるようになった。そのため、より出産・育児に活用でき、必要度の高いものになった。この手帳は自分で経過を記入できる項目もあるが、健診結果などを記録する健康管理のツールであり、予防接種の管理ができ、からだの不調が起こった緊急時の情報源にもなるものである。この母子健康手帳は、個人情報にあふれた母子の成長の記録である。それゆえ、まさにこの手帳は現在においては、家族の「幸せの象徴」ともなっている。

母子健康手帳に関する研究については、原著論文が少なく、母親を対象にその活用状況や有用性等の実態調査が多く、母子健康手帳の改善に向けた評価や検討に関する論文や交

付時の支援の実態等の論文はあるという状況である（藤井 2017）。また、教育への活用としては、看護教育の中で、看護学生における自分の母子健康手帳の活用についての研究がなされ（澤田ら 1994）、看護学生の母子健康手帳に関する意識調査を行っている（薬師寺ら 1988）ものがある。保育者養成においても「小児保健」や「子どもの保健」担当者が、感染症の視点から母子健康手帳を使った授業のあり方を検討しているもの（鳥海ら 2019）や母子健康手帳を使った命の大切さを伝える教授法をテーマにしたもの（吉井 2009）はあるが、数は少ない。したがって、保育科学生の乳児保育の学びのツールとしての母子健康手帳を活用することが、どの子どもの命も何にも代えがたいものと受け止め、日々の保育実践ができる保育者に育つことに、どう影響を与えるかを明らかにすることは意味のあるものと思われる。

前述の吉井（2009）は、保育士を目指している学生が、子どもの命を守ることが保育士の役割であり、健康の維持・増進に努める職種でもあることを自覚することに母子健康手帳が有効に使えることを示し、4 割の学生に自覚が芽生えたとしている。筆者も学生が実感するためには、自身の母親が母親の言葉で語ることに勝るものはない、その媒体として母子健康手帳を使うことの意味は大きいと考える。学生が子どもの頃の話を聞く機会や母子健康手帳を見る機会はあったかもしれない。しかし、その経験はバラバラのエピソードとして、思い出話で終わっている。妊娠・出産・子育てを、経過を追って、自分が学んだ保育の専門知識と確認しながら聞くという経験ではなかったはずである。母子健康手帳に記載された具体的な数値や発達の内容が話に客観性を加え、本当にあった自分の話だからこそ納得でき、自分のことでありながらも、般化できる。母親ないしは家族の思いを、保護者の気持ちと重ね、命の尊さを実感できるのではないか。さらに、子どもの命を守る職種であることに対しての責任を感じ､保育者としての自覚も生まれるのではないか。また、子どもの発達とともに子育て中の話を聞くこと、母子健康手帳の構成や内容にじっくり触れることで保育のヒントも掴むことになると考えた。

本研究の目的は、学生が母子健康手帳を使って妊娠・出産・子育てについて、母親ないしは家族と会話して得た学びの内容を知ることである。母親との会話で得たもの、母子健康手帳について考えたことを明らかにすることである。その過程において、親の思いや愛情をどのようなところで感じるかも明らかにする。そのうえで、保育の出発点である命の大切さや尊厳を感じることができたか、また、母子手帳制度および母子健康手帳の内容を学習することで、保護者の不安を理解できたかを併せてみていくものである。

3．研究の進め方

本研究は授業後の課題としてのレポートの内容をカテゴリー化し、学生の学びを読みとった。

研究の対象者は2019年度短期大学入学の保育科1年生である。その人数は後期科目「乳児保育Ⅱ」を履修した4クラスの学生141名中、課題提出者の131名である。乳児保育は理論編の「乳児保育Ⅰ」と実践編の「乳児保育Ⅱ」に分かれており、理論編の「乳児保育Ⅰ」は前期に終了している。「乳児保育Ⅱ」は演習科目であり、1クラス30数名の学生に対して講義をしている。その1回目の初回授業を2019年9月2日（月）3限にCクラス、4限にAクラス、翌9月3日（火）1限にDクラス、2限にBクラスに行った。

この初回の授業テーマは「母子保健と母子健康手帳」、サブテーマを「母子健康手帳には何が書いてあるの？」とした。ねらいは母子健康手帳を知ることと母子健康手帳をきっかけに母子保健行政に興味を持ってもらうことだった。母子健康手帳の歴史はまさに母子保健の歴史でもある。講義内容は母子健康手帳の意義･目的、歴史、記載されている内容、一般的な活用と保育者としての活用であり、示した順で、授業を展開している。さらに、母子保健法と健やか親子21の説明を加えた。このように、母子健康手帳が何であるかを理解した上で、母子健康手帳を道具として利用し、母親（他の家族を含む）と会話をすることを授業終了後の課題とした。その課題とは「自分の『母子健康手帳』を見せてもらいながら、家族（母親）と話をし、その感想と、母子健康手帳について考えたことを書いてください」である。提出については家族と充分に話ができるように、1か月後の10月の上旬とした。

この課題の提出前に、母子健康手帳に関連する2つの課題に取り組んでもらった。2つの課題は「母子健康手帳の表紙を考案し、意図を添える」と「父子健康手帳を必要と思うか否か、その理由を述べ、必要と考える場合はどのような項目があるとよいか示す」というものである。この課題に取り組むことによって、徐々に母子健康手帳への興味を高め、自身でも手帳の意義など、考えを深めていき、意欲的に取り組める流れを作った。

4．結果

（1）母子健康手帳とのかかわり

母子健康手帳とのかかわりは個人差が見られた。大多数の学生は母子健康手帳との出会いや今までのかかわりは述べてはいない。しかし、小学・中学・高校時代に宿題等で母子

健康手帳を見たり、親から話を聞く課題を経験していると書いた学生は 5 名いた。これにより、今まで学校教育の中で母子健康手帳を使った学習が行われ、印象に残っている学生もいることがわかった。保育を学び始めてから見たと書いた学生も 2 名いた。また、今回のようにじっくり丁寧に見たのは初めてだったと書いた学生は 11 名あった。しかし、母子健康手帳は知っていたが見たことがなかったと述べた学生も 9 名いた。

（2）家族の対応

まず、家族の誰と話したかをみると、母親が 115 名、両親と一緒に話をしている学生は 5 名、祖母が 1 名、家族と表記している学生が 1 名、誰と話したのか不明の学生 7 名、家族とは話をしていない学生が 2 名である。

次に、対応時の様子を見てみる。学生が母子健康手帳を見せてほしい、見ながら、話を聞かせてと家族、母親に頼んだときの反応を書いてくれている学生がいる。以下にいくつかの例をあげる。「『お母さんになるのが夢』と話す母は母子手帳を見ると当時のことを思い出し、嬉しくて泣いてしまうと言って今までは見せてくれなかった。保育のことを勉強していく中でどうしても母子健康手帳が見てみたいと頼み、初めて了解を得た。母子健康手帳は木の箱に入れられ大切に保管されていた」と記述している。大切なものとして保管されている様子を書いている学生は他にも複数みられた。また、「ある夜、母に『母子健康手帳を一緒に見たいんだけど』と言うと母は忙しそうに洗濯をしていたので『また、急にそういうことを言って』と渋い表情をするかと思いきや、いつもの 2 倍の速度で洗濯を終わらせ、母子健康手帳を持って、私が一階へ降りるのを待っていました」とか「母子手帳を見始めると、母は次々エピソードを語ってくれました」「『娘に生まれたときの話をじっくり話すなんて思ってもみなかったわ』と言いながらにこにこ話してくれました」と書かれていた。多くの学生が母親といろんな話ができた、知らない話をたくさん聞けたと書いている。さらに、学生は、エピソードを語る母親の様子を「少し笑いながら、涙ぐんでいました」「話している母は、とても温かい表情だった」「たくさんの話が出てきて楽しそうだった」と書いている。母の話に対する学生の反応は、面白かった、嬉しかった、感動した、驚いた、感謝の気持ちを持った、愛情を感じたなどの表現が随所に見られ、非常に心が動く時間だったことが読みとれた。母親は大切な話をきちんと娘に伝えようとする対応をしていることがわかった。

（3）学生が記述したエピソード

学生が記述しているエピソードを母子健康手帳の記載順にまとめてみる。①妊婦の健康状態・職業、環境②妊娠中、③分娩時（出産時）、④乳児期、⑤幼児期、⑥その他の5つに区分した。①から順にみていく。

①妊婦の健康状態・職業、環境について

親が離婚している学生が両親の名前（父の欄に名前が書かれている）を見て嬉しかったと書いている。その他に、出生届出済証明の欄に父の筆跡を発見し嬉しかった、家族構成・家庭の環境・親の仕事まで記載があることにびっくりした、知らなかった母親の若い頃にしていた仕事を見つけ、母の知らない一面を知って嬉しかったなど書いているものもあった。①について記載があった学生は12名だった。その中には子どもの名前を書く欄があるが、名前を書くときに非常に緊張したと母側のエピソードもあった。命名の由来を書いている学生も数名いた。

②妊娠中について

妊娠中のエピソードは、つわりが5名、体重や血圧に関する管理5名、酒やたばこの摂生などの話を書いた学生は3名あり、妊娠中から母親は子どものことを考え摂生し、大変な思いをしていると記している。その他に、妊娠の経過が理解できることや健診の回数や健診の内容を知識として持てたことをあげている学生が30名あった。エコー写真を貼ったり挟んでいる母親があり、それを見て感動する学生も17名いた。

③分娩時（出産時）について

73名の学生が分娩時のエピソードを書いている。母親にとっても人生の中で何回も経験する出来事ではない。そして、生死を分かつ経験となることもある。また、生命誕生というのは、待ち望まれる瞬間であり、感動の瞬間である。実際に母親の言葉で「生まれて、看護師さんが枕元に連れてきてくれて、涙が出た」「破水して予定より12日早く生まれ、命がけの出産だったが元気な産声をあげたので嬉しかった」「痛かった。でも不思議で、どれくらい痛かったのか全然覚えていない」「出産が終わり、赤ちゃんの顔を見た時、今までの痛みが消えてほっと安心した」と気持ちが語られている。家族や周囲の人の様子も「病院に父や姉、兄がきて、私が生まれるのを待っていた。病室には次々といとこや会社の方や友達がたくさん来てくれたみたいでにぎやかに祝ってもらった」など書かれているものもみられた。また、「吸引分娩で、出産直後に、産声をあげなかったので、とても心配し、その後、泣いたので安心したそうです。へその緒はお父さんが泣きながら、震え

ながら切ったそうです。私も 6 つ下の妹のへその緒を切ったことがあります。その時も大泣きをしながらお母さんと一緒に切りました。まだ 1 年生だったのでへその緒を切ったら死んじゃうと思ってすごく抵抗がありました。でも今は生まれた瞬間から肺呼吸に変わり、へその緒を切った瞬間にお母さんからの栄養ではなく、自分で食べるという子どもにとっての一番最初の自立になるんだと学びました。それを知っているお父さんは、それほど嬉しかったんだと思います。普段泣いているところを見たことがないので貴重だと思いました」と、家族の愛情を感じる得難い出来事を書いている学生もあった。

その他、学生がレポートに綴った出産の物語を以下に示す。「出産が 10 日遅れ大きく育ち、出産時にへその緒が首に巻きついてしまい心拍数が下がってしまいました、病院の先生や看護師の方が吸引分娩にしたほうが母子ともに安全という結果を出し吸引分娩になりました。母は出産時出血多量になってしまい、なかなか動けませんでした。無理してトイレに行き倒れてしまいました。このことを聞いてお産は命にかかわるものだと改めて感じました。なかなか体調も戻らなかったのに、母はそれでも私が生まれたときは本当に嬉しかったと言ってくれて、私も母に出会えて良かったと感じました」「母は妊娠中に浮腫が酷くて、身体のいたるところを指で押すと粘度のように指の形が戻らなかったそうです。出産が近づくと体調がすぐれない日が続き、出産は帝王切開になり、母子共に危険な状態に陥りました。家族みんなが見守る中、何とか無事に私は生まれ、母は 3 日間意識がもうろうとしていたようですが、回復しました」この 2 人の学生のように多くの学生は出産のエピソードに親の愛情や感謝の念を抱く。また、陣痛の痛みや長さの話は必ず記され、それを耐え抜いた母親をすごいと思い、感謝している。正常産の分娩時間は、初産では 12 ～ 16 時間、経産が 5 ～ 8 時間であると聞いた学生であっても、それよりも短い陣痛時間であり、安産だったと母から話されても、一様に母の忍耐強さをすごいと感じている。次に、帝王切開や吸引分娩、骨盤位分娩など正常産ではない場合のエピソードは劇的、感動的な物が多く、感謝の念や愛情を強く感じている。母子健康手帳の記録を見ながらであれば、そこには客観的な数字や言葉があり、よりその印象は現実味を帯びてくる。

その他、出産時の自分の身長・体重については 36 人がレポートに記入している。2500g 以下の低出生体重児や 4000g 以上の巨大児などはエピソードが添えられている。「2490g で生まれた。すぐ保育器に入って、3 日目に赤ちゃんと一緒に退院できないかもしれませんからねと看護師さんに言われショックを受けた」「38 週、1980g しかなかったので大きい病院に搬送された」「平均は 3000 g に対して私は 4016 g あったので普通の子より大きく、

目鼻立ちもはっきりしていたそうです」がそれである。

④乳児期について

この時期の母親の話は心配や不安の内容が多く、母子健康手帳の母親が記述した内容にもその不安・心配、大変さが多く書かれていたと学生はあげている。「8 か月の時に、上の 2 人にうつされ水疱瘡になり、高熱が出て、3 人目だからこういう時はこうしたほうがいいとわかっていたけど怖くなって夜中に病院に駆け込んだ」「発達曲線の標準値の下部ばかりで、毎月の測定値を記入するのが嫌だった。よく食べ、よく寝て、よく遊んで、よく笑って、毎日楽しく過ごしているのに成長を数字で目にすると育児が上手にできていないように感じた。それも今となってはいい思い出」発育曲線をあげていた学生は 18 名あった。「2 歳まで母乳から離れず卒乳で悩んだが、いざ卒乳となったら逆に寂しいという気持ちが大きくなった。私がいなくても他の誰かの子でも生きていけると思った」「私は母にとって初めての子どもだったので小さなことでも不安があり、全然ミルクを飲んでくれない、夜寝てくれないなど母子健康手帳に綴ってありました」「『出産後マタニティブルーになり、自分はこの子をきちんと育てられるのか、とても不安になり理由もなく泣き出してしまう不安定な時期が続いた。しかし、母として情けない、育児放棄と誤解されたくないと、父や親戚、専門家に相談することなく、一人で耐えた』と聞いた。今まで母からはお母さんになれて嬉しかった、毎日楽しかったなど明るい話しか聞いたことがなかった私はそんな辛い思いもしていたのかと心が抉られそうになった」「『ここ 3、4 日、どうも昼・夜がずれているようで、お姉ちゃんに昼、○○ちゃんに夜中とママは寝るときはいつ！？という日々が続いているところです。何とか昼型になるよう挑戦中』と書いてあり、母の当時の大変さが伝わってきて、それでも『挑戦中』と前向き、感謝の気持ちでいっぱいになりました」「産後気がついたこと、変わったことを書く欄に『自信がなくなり、涙もろくなった、家に戻ってすぐ直った』とあり、母に聞くと入院しているときに 2 人きりのとき理由なくずっと泣いてたから書いたということがわかった」「5 か月から離乳食を始め、ある日、ヨーグルトを食べてたら、手や顔に蕁麻疹のような症状が出始め乳製品アレルギーを疑い病院へ行ったそうです。病院での検査の結果、大豆アレルギーであるとわかりました。6 か月から 1 歳まで、食事は醤油、味噌、豆腐，きな粉など使わないで、煮干しや昆布の出汁、野菜の出汁などで味付けした。それはとても大変なことで、私のために食事を毎日考え味付けし作ってくれたと考えるととても有難い」「目やにが多い気がする、左目が開きにくそう、ミルクの量が足りているのか多すぎるのか不安、手が冷たい、睡眠が浅い，

しゃっくりがでるなど心配なことは記入しましょうという欄に書いてあり、その後のページにも母乳をあげる時間のことだったり、睡眠時間のことなどそこまで心配する？と私がお母さんを心配するくらいたくさんあり、その時のお母さんの不安な気持ちが伝わってきました」「少しのことでも心配になったり、これでいいのかと不安になることが多かった、お母さんのような性格の人でもこれだけ神経質になってしまうのに、神経質だったり、心配性の人は、子どもが平均的でなかったらどうなんだろうと思った」「母は初産で不安があったから、母親（両親）学級受講記録欄は全部記入されていて、やはり不安あったのだと言っていました」など数人の学生を除き、母親の語った不安や悩みのエピソードが語られている。その不安や悩みは初産であれば当然とも言えようが、経産であっても皆無ではない。その内容は体重、授乳、離乳食、アレルギー、病気、けが、睡眠などに関して、それは、病名がつき治療やケアに苦労するものから、取り越し苦労と思われるものまで多岐にわたっている。学生は子どもをきちんと育てたいと一生懸命な母の様子を感じ取り、エピソードを伝えている。

なかには、「3 か月くらいの時『ゲップするたびにミルクを吐いちゃうなあ』と感じていた時の健診で医師に言われたことは、『ミルク飲みすぎですね』に加えて『ちょっと太りすぎですね～』と言われたことです。母も祖母も、ミルクを嬉しそうに飲む私を見るのが幸せで、ついあげすぎてしまったというエピソードに、吹き出して笑ってしまいましたが、なんだか温かくてほっこりしました」幸せな家族の様子が語られているものもあり、成長の過程を喜ぶものもある。「3 ～ 4 か月頃は首がすわり、自分から大きな声を出していたそうです。6 ～ 7 か月頃にはマンマと言うようになったそうです。9 ～ 10 か月頃はハイハイをしだし立てるようになったそうです。また、バイバイやパチパチと手を使った動作もできるようになりました」「保護者の記録のところで 1 か月頃や 3 ～ 4 か月などの私の状態がたくさん書かれていました。もちろん乳幼児の記憶はあまりないです。ですが、そこに『5/4 声を出して笑う』など日付と一緒に私の成長過程が書いてあり、当たり前のことなんですけど、私もちゃんとこういう風に成長してきたんだなあと思い、とても感動しました」と、成長を喜ぶ姿も書かれ、学生は親の愛情を感じている。

⑤幼児期について

幼児期は出来事の背景にある母親の気持ちが少し変化していることを感じ取ることができる。乳児期の子どもの成長のめざましさは驚嘆に値する。しかし、それをその時に実感する余裕は少ないと思う。病気やけがへの配慮、きちんと育てなくてはと考える親として

の責任感、子どもはすべてを親に委ねているわけなので四六時中気の休まる時がない時期が必ずある。心配や不安がゼロになるわけではないが、幼児期に入り、初めて歩いた、初めて言葉を話したなどの「子どものはじめて」を感激や喜びを持って話しているものが増えている。「私がはじめて何かをした時など私のいろいろな初めてが書いてありました。私が何かしたのが嬉しかったから、そういう記録が残っていたんだなと思いました。もう今では当たり前のようにできることでも初めてそれをした時は、父も母もとても嬉しかったんだなと思いました」がそれである。健診ページの保護者記入欄の記録はお母さんの状況で記入量には差があったが、入園前の3歳までは非常に細かく記入している母親が多数いた。「何よりも保護者の記録のページに、生後すぐから6歳まで欠かさずに母の文字が書かれていて嬉しかったです。3～4か月頃の記録のページの中に、首がすわるようになった日、指しゃぶりがひどくやめられないこと、2か月と15日で寝返りをした、4か月に入った頃からずりばいが始まって目が離せないことなど、私の成長していく過程の記録を母が残してくれました」「1か月ごとの健診のページを見たときはとても驚きました。なぜなら、そこには、私のことや子育てのことに関する不安や疑問、質問が欄外にまでびっしりと書いてあったからです。私が第1子で、初めての子育てだったからというのもあるかもしれませんが、それでもこんなにたくさん書いてあるのを読むとすごく一生懸命に私に向き合っていてくれていて、少しでも良い子に育てようとしてくれていたのが伝わってきて感動しました」「好きな遊びや気になることなど、本当に細かく書かれていて、母がどれだけ私のことを見ていてくれ、愛してくれていたのだと思い、とても幸せな気持ちになりました」などの記載があった。

さらには、成長過程を詳しく知るとともにその子どもの個性、その子らしさを大切にしている記述も多くあり、学生は、自分は小さい頃はこんな子どもだったんだと改めて感じるようである。「2歳半の頃は先生たちとお昼寝をする時間に部屋から脱走して、ジャングルジムの一番上まで登って先生たちをめちゃくちゃ焦らせました。とても好奇心旺盛で何でもやりたがったので新しいことを始めるときは最初に声をかけると元気よく『何するのー』と興味を示すので周りの子もつられて寄ってきました」や「自分が人見知りなのは4歳の頃からだと知った。『人の輪にすすんで入れず、自分から話しかけることができない』と書いてあって、小さいころにそんな風だと親にとても心配かけたと思った」「4歳の頃の記録には謝られていました。母はとてもつらいことがあって、私は4歳のくせに母の話を聞いて、母のことを癒していたみたいです」とのエピソードの記載がある。また、幼児

期の記憶は学生本人の中にもあり、一緒にその経験を思い出し、昔の親子関係に戻り、その時に感じることのできなかった親の子どもに対する思いを改めて成長した自分が感じることができる。学生である自分がイメージの中で２度目の幼児期の体験をし直す感覚である。それは、「乳児期や幼児期の行動が書いてあり、読んでいて楽しかったです。保育実習に行った際、乳幼児のそういった行動を観察したいと思いました。お父さんやお母さんも読んでいて、楽しかったし、その行動をした時、面白いと感じたと言っており、家族の心情を知って嬉しいと思いました」にも、現れている。

⑥その他

その他には、ワクチンの接種記録、病気の記録、歯科検診の記録の重要性について書かれている。「予防接種や病気の記録にも驚きました。生まれてきてからこんなにもたくさんの注射をしていることです。人が病気にならず、健康な身体で成長するためには必要不可欠なものだと思いました。この記録のおかげで自身の予防接種の有無と病歴を知ることができます。母子健康手帳を見ることがない時は自身の病歴はすべてかかりつけの内科の医師のカルテのみだと思っていました」「一つ真実がわかりました。私のおたふくかぜが母に移ったと言われていたけど､母のおたふくかぜが私に移ったというのがわかりました。母子健康手帳はこういうのを知ることができて思い出話が楽しいです」「特に海外渡航する際には過去の予防接種記録が必要になります。また、海外渡航の予定がなくても、高校や大学でも予防接種歴の確認のために母子健康手帳の持参を指示されることもあるそうです」などで予防接種記録の必要性は 77 名の学生が書いている。

母子健康手帳に興味を持って、兄弟姉妹の母子健康手帳と比べて、兄弟姉妹の分娩の違い、出生時体重の違い、乳幼児期の育ちの違いを母親に聞いたほかに、表紙や内容も比べている。母親の母子健康手帳を見せてもらい比べた学生が１名いた。母子健康手帳は、命がつながっていることまで示してくれるような感覚を持った。

（4）母子健康手帳の効用

どの学生も一様に、母子健康手帳の必要性や内容の多彩さ深さを知ることができてよかったと記している。その意見を５点にまとめた。１点目は予防接種歴、既往歴、成長過程が確認でき、受診時、健診時、入園時の他、緊急時等に活用できる。また、学生自身も詳しく知ることができる。２点目は、妊娠中は妊婦自身の記録ページで尋ねたいこと記載し、記載時にそのページに書かれた注意したい症状を理解できる。子育て中は健診ページ

の保護者記載欄が質問形式になっているので答えやすく、記入することでその月齢の標準的な発達も理解できる。さらに、不安や悩みを記入できるので、書くことで気持ちが落ち着き、健診時医師からアドバイスを受けられる。3点目、視覚的に発育経過を追って確認できる乳児身体発育曲線、幼児身体発育曲線があり、そこにプロットすることで発育を判断できる。4点目は自治体によって内容が変わる任意様式と呼ばれる妊娠・出産・育児に関する情報を載せているページがあり、それぞれの時期に役立つ。情報はいろんなものから収集できるが、その信ぴょう性に不安を感じることがある。しかし、母子健康手帳は母子保健法の定めにより市町村が発行するもので、信頼でき、必要度の高い情報がコンパクトにわかりやすくまとまっている。5点目は、母子健康手帳は親子のきずなであり、自分が生まれた証であり、母親の誇りであるといった精神的な支柱になる、であった。

（5）母子健康手帳の改善点、要望

以下に学生が記述した改善点や要望をあげる。身体発育曲線を利用する場合など、母親が不必要な心配や不安を抱え込むことがないように数値のみで判断しないような説明が書き加えられているとよいとの意見があった。妊娠・出産・子育てのガイドと呼べる任意様式があり、役立つ情報が載っているのに、母はあまり活用しなかったといっていたので、活用できる説明があるといいと感じたという要望もあった。また、任意様式の内容の充実には病院や病気の対処法、父親が、育児参加しやすくなるような情報（食事や沐浴やおむつ交換の他にかかわり方、遊び方）、子どもが利用できる公園や施設のマップを入れるなど具体的な提案があった。育児等へのアドバイスは母親への負担感を強めない口調で書くこと、全体に文字ばかりで硬い感じを受けるので、イラストを入れてカラフルにすると読みやすい、父親や家族が記入できるスペース、手形を載せ、写真を貼るページがあるとよい。表紙も可愛らしいものにするとよい。電子化を考えること、父子健康手帳もあるといいなど幅広い意見があった。母子健康手帳が健診の結果や予防接種、病気などを記録することで母子の健康管理をする役割を持っていることを理解はしているが、育児の教科書、ガイドとしての役割、家族の思い出や記録としての役割も重視していることを改善点や要望からくみ取ることができる。

（6）「母子健康手帳を介して家族から話を聞く」経験から保育者として考えたこと

学生が保育者という視点から考えたことを以下に並べたが、その内容は保護者の不安に

対するもの、大切な命を預かっているという自覚、母子健康手帳が保育に活用できるという意識、知識を高めたいという向上心や保育者としての態度である。

母親の話から多くの保護者は子育てに不安や心配を持つことが理解できた。育児は大変なので保護者のことも気にかけて支援したい。子育て中の不安や心配をたくさん聞き、不安を軽減したい。そのための専門的な知識を身につけたい。母親が命を懸けて生み大切に育てられた子どもを、責任を持って預かり、保護者に向き合って支援したい。一番子どもが成長する時期を保育者に託しているんだと思うと責任を持って成長を見守るために知識を高めたい。保育者には母子健康手帳の知識も必要で、どこを支援に役立てるか理解しておく必要があり、保護者にも母子健康手帳を書くことを勧めたい。母子健康手帳はその子の発育・発達を理解でき、予防接種歴や既往歴により健康管理ができ、保護者と母子健康手帳を介して話ができるようにしたい。数値のみで判断することがないように保護者にアドバイスができるようになりたい。安心を与え、余裕を持った保育者になりたいなど、さまざまな思いが述べられていた。

5．考察

本研究の目的は、母子健康手帳を使っての母親との会話で得たもの、会話を通して母子健康手帳について考えたことを明らかにすることであった。さらに、その明らかにされた学びが保育の出発点である命の大切さや尊厳を実感することにつながったかを確認し、その視点において母子健康手帳は活用できるものかをみるものでもあった。さらには、母子健康手帳制度および母子健康手帳の内容を学習することが学生にとり、保護者の不安を理解し、保護者支援も保育には重要であることを実感できたかを計るものでもあった。

レポートに書かれた内容でカテゴリー化をしながら、その人数よりも実感できたことや考えたことの内容を取り上げている、少数であってもさまざまな学生がどのように感じているかを重視し、学生の言葉そのままで示すことを多用した。アンケートのように構造化されたものを使用していないので、数値化して有効性をうたうことを目指しているものではない。

家族から話を聞いたと読みとれないレポートは 2 名あったが、母子健康手帳を見て、母親が書き込んだ記録はしっかり読んでいる。131 名の学生のすべてが家族から愛されているという気づきや親への感謝を言葉にしている。学生は母親が妊娠・出産を乗り越え、子どもの命の尊さを知り、命を大切に思い、子育てを懸命にしていることを感じ取っている

ことがわかった。命の重みや命を大切に思う気持ちが強まったと感じ取れる内容であった。

今回、母子健康手帳を使った母親及び家族との会話を課題としたことで、じっくり母子健康手帳を見ることができ、多視点から気づきができた学生が多かった。名前を知っていたが見たことがなかった学生も、何度もみている学生も、知らない内容も多く、保育を学んでから改めて細部まで見て気づくことが多かった。さらに、母親や家族の話を聞くことで平面的な健診の数値も立体的な３次元の形あるものとしてイメージしやすく実感でき、理解が深まったのではないかと考える。母親の話だけでなく、妊娠・出産・子どもの乳幼児期の時代、その時のものであり、その時の母親を感じることができ、実在した過去の証明である母子健康手帳が物語るものは大きい。強い感情を伴った非日常的な記憶は印象に残り、知識としても定着しやすい。一般論としての成長の過程が自分という一番身近な個別的な存在の成長過程と比較され、よりリアルに強化されたと思われる。母子健康手帳に記録された妊産婦は自分の母であり、母子健康手帳に記録された新生児および乳幼児は自分自身であり、現実に存在する人間である。したがって、命を実感するには十分であると思われる。妊娠・出産は病気ではないというが、非妊時に比べリスクの高い状況であり、分娩は命の危険を伴い生と死が紙一重の緊張の瞬間である。そして、母親が命がけの大変な思いをして出産し、よい子に育てたいと心配と不安の中、子育てをした話を聞けば、感謝の言葉しかない。自分の命を大切に生きようと考えるのは当然の感情であり、ほとんどの学生が言葉にしている。

さらに、母の話は大変さだけを語っていない。子どもの成長を喜んでいる、苦労さえもいとわず、よい思い出と嬉しそうに話す。幸せな気持ちになったと子どもに感謝している。その母の思いに学生も愛されていると素直に思う。保育者になろうと考えているこの時にそう思えることは非常に好ましいことと思える。中には、精神的に非常に辛い状態を話し、弱い自分を見せた母親もいたが、その母をダメな母と思う学生はいなかった。

一人の学生が「保育の大学に入り、慣れていないことばかりで『私は保育士にむいていなかったな』と感じることが多々ありました。でも、このような母子健康手帳を見るということをきっかけに、小さい頃に憧れていた先生という職業を今も目指していることはすごいことだ。自信をもてることだと思いなおすことができました。母子健康手帳をみて、自分のモヤモヤな気持ちがなくなるとは思っていなかったので驚きました。でも、よかったです」と書いている。この母子健康手帳を見ながら、乳幼児期の自分の話をしたことは、日常の中で意識しなくなった親に愛されていることを再認識し、人に大切にされたことを

思い出し、自分も愛したい、人を大切にしたいと思い直すことができたのではないかと考えた。

このように母子健康手帳を細部まで理解した学生は、保育の場面、入園や健康管理で活用したいと意見を述べているものもあった。これは母子健康手帳が母子の健康管理を目的にしているので当然であるが、特に感染症の多い乳幼児期においては予防接種歴、既往歴は重要だという意見が多かった。十分に母子健康手帳の活用方法を理解できたと言える。また、後半の市町村独自の任意様式が育児のガイドになるので活用を勧めたいとの意見が出てくるようになったことは、母の子育てのエピソードから、母親の心情、つまり保護者の子育てに対する不安や心配という心情を理解したと考えられる。母子健康手帳の役割に対する理解として特徴的なことは、本来の母子の健康管理に寄与しているということだけでなく、親子の記録、親子の歴史を残す大切なものという意識が強まったということである。

6．おわりに

母子健康手帳を介して、学生自身の成長過程や自分のルーツを知るための母親との会話は、大きな意味があることだとわかった。保育者として「保育者は命を守り、健やかな発育・発達（育ち）を支援する役割を担うもの」との自覚も強化されることがわかった。したがって、今後も命の大切さを実感できる母子健康手帳を活用した授業を継続したい。

この研究の限界はどの程度に母子健康手帳が有効であるかを示していないことである。また、研究に使用した学生レポートは記名し評価の対象となっているため、評価を気にして批判的なことや否定的なことを心情的には書きにくいということも充分に考えられることである。

今後はこの結果から得られた内容をもとに簡単なアンケートを作成し、実施すれば、効果を客観的に見ることは可能になるのではないかと考える。

引用・参考文献

・厚生労働省　「保育所保育指針」2018
・巷野悟郎、福島正美　子どもの城小児保健部（1999）平成 11 年度厚生科学研究（子どもの家庭総合研究事業）日暮版　母子健康手帳の評価とさらなる活用に関する研究　分

担研究　母子健康手帳の変遷に対する歴史的レビュー
・藤井美穂子（2016）「母子健康手帳の活用と現状と課題についての文献検討」日本赤十字看護学会
誌　17 巻　1 号　p 61-66
・薬師寺真美、山崎優子ほか（1988）母子健康手帳についての一考察　衛生看護科女子の母子健康手帳に対する意識調査　第 19 回日本看護学会集録　　p 150-152
・澤田珠美、村田恵子（1994）看護学生における自分の母子健康手帳の活用経験と教育的意義　神戸大学医療技術短期大学部紀要　3 巻　2 号　p 97-102
・吉井珠代（2009）生命の大切さを伝える教授方法ー母子手帳を活用して－　四條畷学園短期大学紀要　42　p12-17
・鳥海弘子、味田徳子（2019）保育者養成校の学生における感染症対策の現状から「子どもの保健」「子どもの健康と安全」の授業内容の検討－母子健康手帳の学びを通して―　秋草学園短期大学　紀要 36 号　p 117-128
・青木美菜子、粕谷和美、藤巻わかえ（2009）母子健康手帳の積極的活用にむけて－保護者への質問紙調査から－　小児保健研究　第 68 巻　第 5 号　p 575-582
・厚生労働省　母子健康手帳について
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/boshi-hoken/kenkou-04.html
・厚生労働省　母子手帳の様式について
省令様式：https://www.mhlw.go.jp/content/000622161.pdf
任意様式：https://www.mhlw.go.jp/content/000622160.pdf

Class Practice Using the Mother and Child Health Handbook: What Childcare Science Students Got from Conversations with Their Families through the Mother and Child Health Handbook

Shibata, Yuko*

保育者は命を守り、健やかな発育・発達（育ち）を支援する役割を担うものであるが、保育者が守るという命の尊さを保育科の学生が何をもって実感できるのだろうか。それは、自分自身の母親（家族）から親としての思いに触れることだと考えた。そして、学生に、母子健康手帳を見ながら誕生前後について母親（家族）と会話をしてもらった。本研究の目的は母親の妊娠・出産・育児のエピソードから何を学生が学んだかを知り、保育の出発点である命の尊厳を意識できたか、保護者の子どもへの思いが理解できたかを見ることである。

結果、学生が書いている妊娠・出産・子育てのエピソードの文面からは、面白かった、嬉しかった、感動した、驚いた、感謝の気持ちを持った、愛情を感じたなどの表現が随所に見られ、非常に心が動く時間を持ったことが読みとれた。母親は大切な話をきちんと娘に伝えようとしていることがわかった。

今回、対象者とした１３１名の全ての学生が家族から愛されているという気づきや感謝を言葉にしていた。学生は母親が妊娠・出産を乗り越え、子どもの命の尊さを知り、命を大切に思い、子育てを懸命にしていることを感じ取り、命を大切に思う気持ちが強まったことがわかった。

キーワード：母子健康手帳，命の尊さ，保育者の自覚，妊娠・出産・子育て，保護者理解

**Nagoya Ryujo Junior College*